ふるさと発見

第一部・猿橋物語

<12>

「これが浮き出したものか知らないが、この橋は実によくできている。正直のところ、こっちがいやになっちゃうくらい……」

やはり保存協議会のメンバーで、建築学の権威岸谷孝一東大工学部教授は猿橋の"構法"に感嘆する。猿橋の専門家の目から見る[illegible]下段の一（に）（はね木）はもっと長い方がよいなど、欠点がないではない。が、ともあれ猿橋の構造は最上段の四の桁から枕梁（まくらばり）を介して三、二、一の桁へと伝わり、最後にタテの枠柱（わくばしら）で両岸に伝わる仕組み。それは構造力学の理にかなった傑作だという。

岸谷教授らがさらに驚かされたのは、[illegible]だったことだ。

[illegible]の決まった五十四年、岸谷教授らは猿橋の解体調査を実施した。その時、例えば橋の北側では[illegible]桁のうち半数[illegible]だったのは一の桁ぐらいで、残りは[illegible]から出た桁の先の部分がシロアリに食われたり、ボロボロに腐食したり。特に刎木を使った四、三の桁がひどかった。

桁といえば、猿橋を支える[illegible]猿橋にとっては"心臓"。前回、昭和二十四年の架け替えの時、桁の部分をアスファルトで補強したが、これが逆に土中の水分を吸い上げて、腐食を早めたと専門家は言う。

「でも、橋は落ちなかったでしょう。[illegible]しようもなく[illegible]。つまり、この橋の[illegible]ったのです」（岸谷教授）。

「[illegible]」ではないが、岸谷教授もやはり、猿橋の[illegible]を大陸の[illegible]と見る。

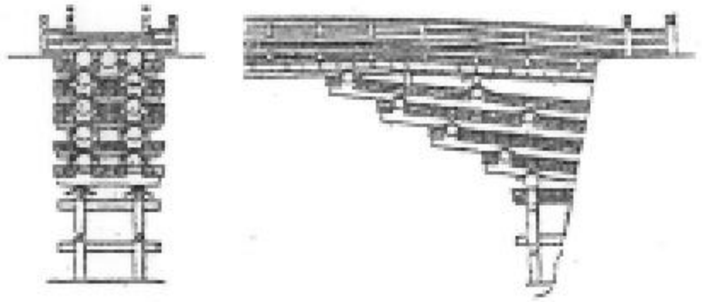
[illegible]として[illegible]ているが、国内では、どこにも例がない。ただ、中国のクリーク（[illegible]）には[illegible]"構法"が確かにあった。そこを[illegible]年二月、[illegible]を訪れた時、[illegible]の人に猿橋の写真を見せたが、「ついぞ見たことがない」との反応だったという。

「中国の"構法"が何世紀も[illegible]を経て入って来たんではないでしょうか。この橋、そもそも大和民族の発想じゃない。日本人なら（[illegible]）を立って両岸に[illegible]り、狭い場所に橋を架けて[illegible]だ対岸を結ぶことを考えたでしょう」

だからこそ猿橋の[illegible]があり、[illegible]したいと岸谷教授は[illegible]の[illegible]情熱を燃やすのだ。

昭和の橋 ⑥

◇猿橋の側面図と断面図（鈴木の資料から作成。大月市教委提供）



（注）上から4、3、2、1の桁、縦が枠柱、刎木のあるのが枕梁

構造力学上の傑作 岸谷教授も感嘆…

実に見事な"構法"

猿橋の構法を高く評価する岸谷教授